

2008年1月25日発行

ぱんす

四季の会・ユーザーズ・サービス

236号

発行人 浅沼 邦夫

拝啓 寒冷の候、先生におかれましては益々ご活躍のことと存じます。

「節分には豆まきをしますか！」最近、大声で「鬼は外、福は内」を聞かなくなったようです。私は大声で必ずやっています。今年の厄払いと「家内安全・商売繁昌」を祈願します。翌日は立春。自分の気持ちを変えていきます。私は、時代はどう変わろうが、事務所をよくしようというトップである所長先生の心願こそ大事かと思っています。

節分のしきたりは、昔、鞍馬山に鬼が住んでいて、都の人々に乱暴するので大変怖がられていた。ある日都で暴れた鬼に向かって人々がたくさんの豆を硬く煎って、鬼の目に投げつけ追い払った。これが始まりで節分の慣習になったそうです。

大体どこでも「福は内！鬼は外！福は内！...」が一般的な習慣になっています。しかし、「福は内、鬼は内」といわれているところもあるのです。「奈良県の天河神社」では、鬼は内、福は内で鬼を接待します。「群馬県の鬼石町」では、昔鬼が投げた石でできた町と言われており、鬼は町の守り神になっている。そこで近年では、全国から追い出された鬼の安住の地とうたっており、「福の内、鬼の内」というのです。

佐渡両津の山本家では、昔田植えが暴風雨に遭った時、鬼が助けてくれたという伝説があるため「福は内、鬼も内」というのだそうだ。そこで経営者の心を揺さぶる貧富の経験。「鬼は内、福は外」の民話がある。

鬼は内！福は外！

昔、昔、ある所に貧しいお百姓さんとそのおかみさんが住んでいました。今日は節分です。でも貧乏で、家から鬼を追い出す豆がありません。「福は内、鬼は外。鬼は外、福は内」、元気な声が隣りから聞こえてきます。「わしも豆をまきたいの。」とお百姓さ

んが言いました。「私もよ。でも豆がないわ。情けないね。」

「真似だけはできるさ。」と、お百姓さんは空の杵を持って立ち上がりました。「福は外、鬼は内。鬼は内、福は外。」と必死に叫びました。家の外で、赤鬼さんと青鬼さんが、それを聞きました。豆を投げつけられ家々から追い出され、「逃げ込むのもってこいの家を見つけだぞ。」と鬼達はその家に飛び込みました。

「お、お、鬼が来た。」とお百姓さんは、たいそうビックリして腰が抜けてしまいました。「恐がることはない。俺達は、どこへ行っても豆を投げつけられ、追い出されてしまう。どこにも行くところがない。この家には豆がない。しばらくおかせてくれ。」「だ、だ、だめです。」とお百姓さんは首を振りしました。

鬼は「じゃ、どうして『鬼は内』と言った。」「そ、それは...でも寝る布団がありません。」「それに、食べる米もありません。」とお百姓さんは言いました。

赤鬼は、これを聞くと笑って言いました。「心配するな。お前に俺の虎の短パンをやる。米屋に持って行って米と換えてこい。」赤鬼は短パンを脱いで渡しました。鬼の虎の短パンを持って町の米屋に出かけました。「何、これは本物の赤鬼の短パンか。」と主人は言う、しばらく念入りに見たり、触ったりしました。「とにかく、この虎の短パンは最高だ。」主人は、籠一杯の米を渡しました。

その晩、米を炊き、鬼は米を全部食べきってしまった。次の朝、鬼に言いました。「もう米を食べきってしまった。もうお帰りになって下さい。」青鬼は、これを聞くと笑って言いました。「心配するな。お前に俺の熊の短パンをやる。また米屋に持って行って米と換えてこい。」青鬼は短パンを脱いで渡しました。

お百姓さんは、さっそく青鬼の熊の短パンを持って町の米屋に出かけました。「何、これは本物の青鬼の短パンか。」と主人は言う、しばらく念入りに見たり、触ったりしました。「とにかく、この熊の短パンは最高だ。鬼の短パンが二つも手に入るとはな。家の家宝にしよう。」

主人は、嬉しくて、馬を借りてくると、馬が運べるだけの米を乗せてあげました。お百姓さんは、お昼に米を炊きましたが、鬼は全部たいらげてしまいました。でもお米はまだ沢山残っています。

「晩ご飯には、ご飯とおいしいおかずも出したいな。」お米を売って魚と野菜と酒を買いました。「うわ。すごい。」と、鬼達は食卓の上に載っている山のような食べ物に驚きました。「ご飯とお酒、好きなだけ召し上がってください。」と鬼に酒をつぎました。「今夜は豪華な祝宴じゃ。お前達も、食べて飲め。」赤鬼と青鬼は、しばらくすると歌ったり踊ったりし始めました。お百姓とおかみさんもそうしました。

次の朝、節分も終わり、辺りは静まりかえっていました。「節分も終わった。山に帰

る頃じゃ。」と赤鬼。「豆まきされずに、ここで数日の素晴らしい日々を過ごせた。」と青鬼。「ありがとうございます。私どもも腹一杯食べたり飲んだりすることができました。米がなくなるまでここに居てください。」「それはできん。米をお金にかえろ。そのお金で一生懸命働け。」と赤鬼。「鬼でも貧しい人間は助ける。」と青鬼。鬼達は静かに家をあとにしました。

お百姓さんは、鬼に言われたように一生懸命働きました。そして、まもなく村一番のお金持ちになりました。めでたし、めでたし。—— 厳しい時代の経営者（税理士）にとって、ほのぼのとした民話の中に心を揺さぶられることもあります。

よいご縁を！いいお客様を！

お客様あつての会計事務所です。お客様とのご縁がご縁を呼んで思わぬ方向に発展し、よい結果に恵まれた経験は誰もが持っていると思う。私たちは、毎日毎日多くの人に会うか、または一回限りしか会うことのない人も多い。人には、仏様や神様のような人もいる。また、鬼のように、こわい、真剣に叱り、怒る人もいる。その鬼のような人には、よい縁と思い、よい関係を続けていけば、会計事務所にとって、良き「鬼に金棒」になるのです。

会計事務所は「鬼は内、福は内」は大事のようです。天は大切な人に引き合わせる時には、それがすれ違いで終わらさないように、機を熟（じゆ）させて引き合わされる。すると、その出会いを通して大切なことに気づかされ、肚が決まり、少々のことではもう動揺しないだけの人生観が育っていく。私たちは、大いなる存在に見守られ、導かれていると思わざるを得ないのです。

この世の中は波動でできている。小学校の理科の実験で、音叉を使って共鳴の実験をしたことがある。共鳴すれば、2倍3倍もの音になる。それと同じで素晴らしい波動の人物と共鳴しあえば、こちらの運勢も2倍にも3倍にも増強するのです。

良い縁がさらに良い縁を尋ねて発展していくさまは、誠に妙なるものがある。またいい人に交わっていると、よい結果に恵まれる。人間はできるだけ「いい機会」「いい場所」「いい人」「いい書物」に会うことを考えなければならぬのです。そんな考え方を常にもっていくことが大事なことかと思うのです。これからは人を大事にする、お客様を大事にする、お客様に満足されることが重要です。

「ありがとう」という言葉がある。「ありがとう」常に当たり前に使っています。「ありがとう」の言葉を多くのお客様から言って頂け、そして上司や部下や家族から「ありがとう」と言ってもらえる企業経営が大事です。2008年は正に中小零細企業にとって、受難の年となります。「ありがとう」という感謝の言葉が満ちあふれる職場づくりを行い、職場の活性化を通じて厳しい時代を乗り切る必要があるのです。